

言語障害への語用論的理論からの介入

小坂美鶴*1

要 約

最初に、言語障害への介入理論として(1)神経心理学的理論(2)行動理論(3)情報処理理論(4)言語学的理論(5)認知構造理論(6)語用論的理論の基本的観点と原則を紹介した。次に、語用論的理論の学問的背景と動向を述べた。語用論は発話の形式を決定するための文脈において生じる発話行為であり、話し手側の発話に託したメッセージの伝達と聞き手側の意図解釈の問題を取り扱う理論である。それ故、社会学や心理学、認知論的な分析にも応用され、学問としての進化の中で各分野の定義や理論、方法などが異なっている。さらに本論説では、軽度失語症患者と右半球損傷群を対象に漫画説明のテキスト構造とテキスト内容について健常成人の産出したテキストと比較し、言語障害への語用論的理論からの研究結果を示した。分析結果は、テキスト構造の結束性要素である指示語や接続語の使用には有意差はなかったが、有声休止や言い直しなどの談話の結束性を阻害する要因が軽度失語症群で有意に多く、右半球損傷群では漫画の内容と合わない項目が多く、テキストの整合性に障害が認められた。この研究結果から言語能力の評価では明確にならない言語障害を明らかにすることができた。すなわち、軽度失語症患者の渋滞した内容に乏しい発話や右半球損傷患者の内容と合わない発話といった実際の言語使用の印象と一致する結果が得られた。これまでの言語障害児・者への介入では、言語能力の改善を目的にしたアプローチが主流であったが、言語能力と言語使用に乖離がある現実からコミュニケーション能力を目的の第一義とした語用論的理論による介入についての研究が増えてきている。これからの言語障害への介入においては実際の場面で状況に合った言語使用を目的とした介入プログラムが重要であり、会話や談話分析の方法論の統一性についても研究が進み、今後の語用論的理論による介入の実践の検討と学問的な発展が期待される。

言語障害への介入理論

言語障害児・者への介入のための理論は、これまでに多くの研究者達が様々な側面からの観察と問題点の理解を積み重ねた結果として打ち立てられ、その理論に基づいた実践がなされてきている。ここでは言語障害への6つの介入理論を紹介するとともに、特にコミュニケーション能力を言語の第一の目的であるとし、その確立に焦点をあてた語用論からの介入について詳細に検討する。語用論は、言語を使用する者の言語規則における知識だけではなく、一般的知識や考え方などの認知構造と関連した要素や社会的行動とも関連性が大きく、動的で複雑な要素の相互作用によって成立している。そのため、その学問的領域は幅広く、哲学や言語学、心理学、社会学、情報科学、認知科学などからのアプローチがなされている。人が言語を使用し相互にコミュニケーショ

ンすることを目的とした言語障害への介入は今後の言語治療にとって重要な視点であることから、多角的な視点から言語障害への介入理論として語用論を応用しながら、その具体的な方法論を検討する必要性があると考えられる。

最初に6つの介入理論について Carrow-Woolfolk¹⁾を参考にその基本的観点と原則を以下に述べる。

1. 神経心理学的理論

この理論の基本的観点は言語が脳機能に基づいたものであり、個々の言語行動は脳の特定部位に関連しているということである。従って言語障害のタイプや重症度は脳機能障害のタイプや重症度に関連して出現する。介入の原則は第1に障害された脳機能あるいは発達的に未熟な脳機能の改善に治療の基礎を置くことである。次に障害された機能の代償のために脳の他の部位と関連して訓練をすることであり、

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻
(連絡先)小坂美鶴 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

シナプスの促通のために反復して行うことも重要である。しかし、この理論では改善の神経学的基礎についての証拠が未だ十分ではないことや状況変数に対する注意が払われていないこと、また治療者中心の訓練方法を用いることや自然な話題を提供しないことなどの批判がある。

2. 行動理論

言語が言語行動の刺激と反応に基づく学習行動であることがこの理論の基本的観点であり、言語は環境によって学習され形成される。成人の完成した言語行動との相違が言語障害であるとする。この理論による介入の原則は刺激と反応によって得られた成果によって言語を変容することであり、成果は反応頻度の増加あるいは減少させるための基準となる。その刺激、反応、成果の要素はそれぞれに構造を含み、最小限に異なった課題の系列的提示をプログラム化することが重要である。治療者が改善（発達を含む）に関して判断した基準を基準に用いる。この理論に対しては人工的な言語を生み出す人工的なフォーマットを用い、実際の相互作用場面における機能的な言語を設定していないということや、言語の理解と意味を無視しているという批判がある。

3. 情報処理理論

この理論の基本的観点は言語的入力と出力との間の階層関係によって現される。言語コードの解読と符号化の系列過程における個々の成分のいずれかの機能に障害があるとそれ以降の過程の遂行が妨げられ、異なった種類の言語障害が出現する。介入の原則はまず、最も階層の低い水準に直接的な教育を行い、言語に対する知覚や記憶、表象の相互作用を表す階層を考慮しながら系列的に進めていく。刺激は単純から複雑へ、具体から抽象への方向に提示する。言語と学習の問題を表裏一体のものとして扱い、代償的方法是システムの統合部分として治療する。この理論に対して言語処理の妥当な記述ではない階層的システムを用いていることやシステムの部分関係に影響するシステム外の要因を無視していること、情報処理過程に注目はしているが言語それ自体に関しての論議がなされていないことに批判がある。

4. 言語学的理論

この理論の基本的観点は、言語はそれによって個人が不特定多数の発話を生成できる抽象的な規則の体系であるという点である。言語規則は子どもによって導きだされ、子ども自身が規則の選択と内的構造を調節し、その過程は普遍的で生得的である。介入の原則は言語の形式、内容、使用の相互作用を入力として用い、言語表出のために規則を導き出すように促通し、原因よりも表出に重点を置く。その

際、正常言語の成長パターンを追った発達段階における改善を指標とする。この理論に対する批判は、後に付加されてくる原因や言語の遂行システムを無視し、言語理解に対しての十分な注意がなされていないことである。

5. 認知構造理論

Piaget 派に代表される言語の非モジュール性理論の代表であり、言語は学習プロセスにおける多くの類似した認知課題の一つであることを基本的観点とし、言語障害やそれに関連した認知的問題は学習システムにおける基本的問題の結果である。介入の原則は言語を教える以前に言語の認知的前提を教える。すなわち、パターン分析やカテゴリー化についての学習が先行する。言語は他の認知的課題と同一の方法で学習されるとし、言語規則を導き出すための問題と言語の遂行の問題は別の手続きが必要とされる。この理論に対して言語が常に特定の認知的課題に先行するか否かが明確ではないことや言語が逆に特定の認知課題を学習する手段であることを考えていないことが批判されている。

6. 語用論的理論

基本的観点は、言語の第一義的な機能はコミュニケーションであり、その基本的単位は発話の形式を決定するための背景（文化）や状況の文脈において生じる発話行為であるとする。言語は環境との相互作用を通じて獲得され、言語障害はコミュニケーションにおける相互作用過程での障害であるとする。この障害は子ども自身のシステムにおける問題であることもあれば環境における問題であることにも関連している。介入の原則は言語それ自体にアプローチすることではなく、言語を社会的相互作用のスキルとして教える。メッセージの理解と表出の両者すなわち話し手としての言語発信者と聞き手としての言語解読者の両者を強調する。そして最も良い介入環境は自然場面としている。

以上、6つの言語障害への介入を紹介した。

語 用 論

語用論では、語や句、文といった言語表現それ自体が言語内でもつ形式・意味を取り扱うのではなく、言語表現が使用されるコンテキスト（状況文脈）を考慮し、話し手側が発話に託して聞き手側にメッセージを伝え、また聞き手側がその発話からどのようにして話し手側の意図を解釈するかという問題を取り扱う理論である²⁾。例えば、ある文が具体的な状況の中で発せられた場合、その文自体がもつ意味とその状況によって話し手の意図を伝達し、それによる聞き手への効力をもつ。語用論研究は言語学者にお

ける言語への興味が音韻論や統語論といった形式的側面から1960年代になって意味論から形式、意味、コンテキストを包含した言語の機能面についての研究まで拡大していったことに始まり、さらに哲学者である Austin³⁾ の発話行為論や Grice⁴⁾ の会話規則としての協調の原理などが語用論研究の基礎となり、学問的な発展がみられた。近年では社会学や心理学、認知論的な分析にも応用され、学問としての進化に伴いそれぞれの分野で語用論の定義や理論、方法などが異なっているのが実情である。しかしながら、会話や談話分析の手法など細分化された研究が増えてきて、方法的な統一が試みられてきているのも事実である⁵⁾。

コミュニケーション能力に焦点をあてた語用論的理論は、子どもの発達の視点や言語障害児、特に自閉性障害児および脳損傷患者の言語障害の分析にもその有効性が示されている⁶⁻⁹⁾。言語形式の障害とコミュニケーション能力との乖離のある失語症患者への治療法や代償的手段としての研究報告^{10,11)}も増えてきている。また、右半球損傷群や痴呆症の談話能力についても語用論的理論からのアプローチによりその障害が明らかにされてきている¹²⁻¹⁵⁾。

イギリスの言語学者 Halliday¹⁶⁾ は、機能文法を体系化し、意味体系を扱う機能部門として言語の表象的・認知的である観念的機能、言語を社会的な目的のために使用する対人関係の機能、言語を言語的シンボルとして意味と構造をもったテキストの産出のために使用するテキスト形成的機能に分類した。すなわち、我々のメッセージ伝達において結果的に話し手が聞き手側にテキストとして産出した言語表現は、まず伝えたい内容である意味があり、それを自らの言語表現の中から選択した表現で、相互交渉相手に対してある態度で伝えるということになる。最終的に具現化されたテキストは、言語形式自体の構造的なつながり（結束性）をもち、意味的な一貫性（整合性）をもつものとなる¹⁷⁾。

語用論的理論の適応（自験例からの検討）

次に語用論からの言語障害への介入の適応について筆者の研究結果とその成果を検討し、語用論の適応について考察したい。この研究は、Hallidayらのテキストの整合性と結束性を参考に、言語の形式的側面では特に問題のない軽度失語症患者と右半球損傷群を対象に、脳損傷患者のテキスト形成的機能について分析したものである。研究の対象、手続き、分析方法および結果と考察を以下に示した。

【対象】標準失語症検査（以下 SLTA）で理解、表出とも 9 割以上の軽度失語症患者10例と右半球損傷

患者 8 例、対照群として健常成人18例とした。

【手続き】SLTA 補助テストの「黒猫と白猫」の4コマ漫画（図1）を被検者に口頭で説明してもらい、オーディオテープで録音したものを転記し、分析に使用した。

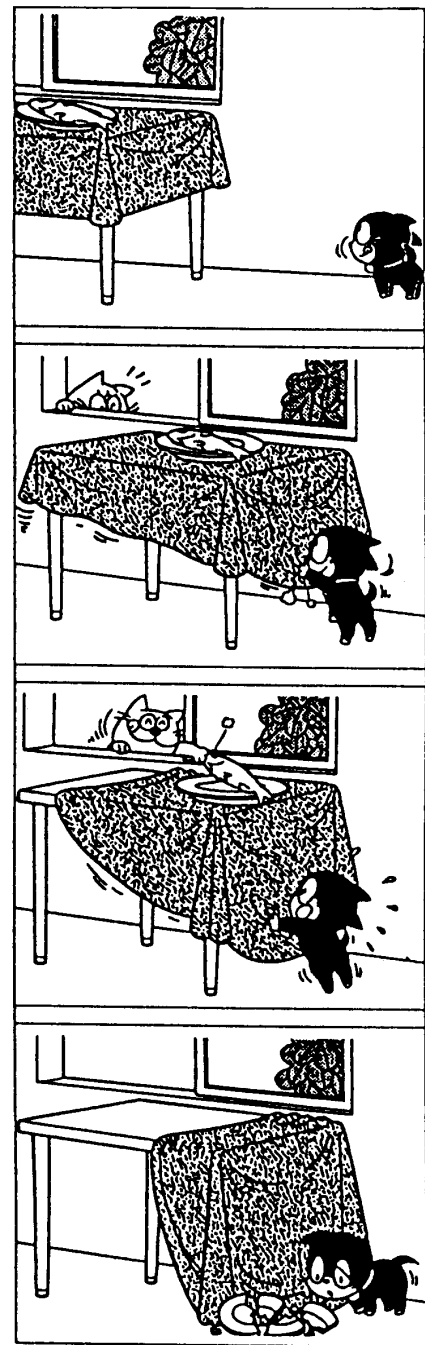


図1 漫画の説明に使用した4コマ漫画「黒猫と白猫」は、SLTA 補助テスト『まんがの説明』から抜粋。

【分析方法】被検者のテキスト構造の指標としてその長さを形態素の平均数で表し、ならびに結束性の指標として指示詞（語）と接続詞（語）の一人あたりの平均使用数を算出した。またテキストの長さの指標から除いた有声休止や錯語、言い直しなどの談話の結束性を阻害する要因としてその種類と誤りの平均数を検討した。次に整合性について操作的に健常成人群のテキストを指標とした基準を作り、各群を比較した。

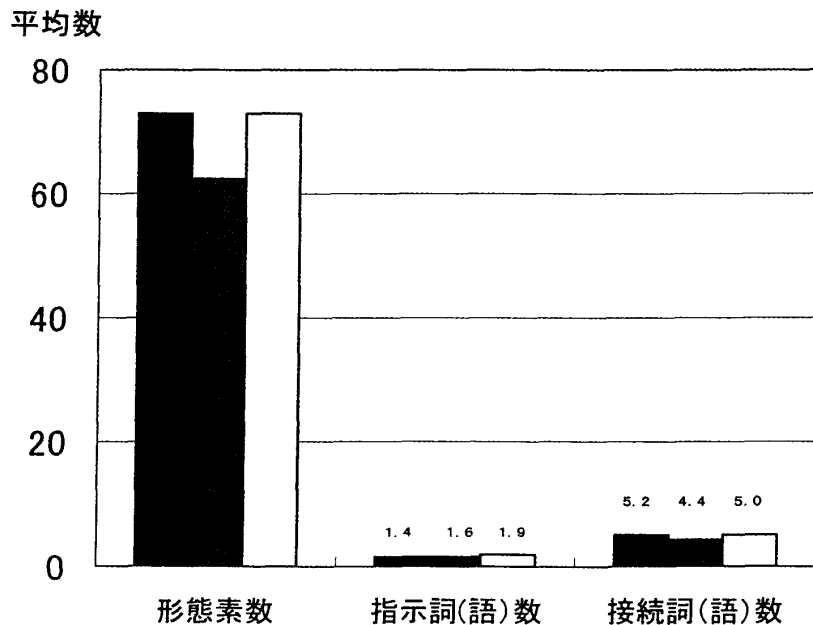


図2 テクストの長さを総形態素数で表し、テキスト構造の結束性要素として指示詞(語)と接続詞(語)の平均使用数で表した。それらをそれぞれの群ごとに示した。グラフ上の■は健常成人群、■は軽度失語症群、□は右半球損傷群。

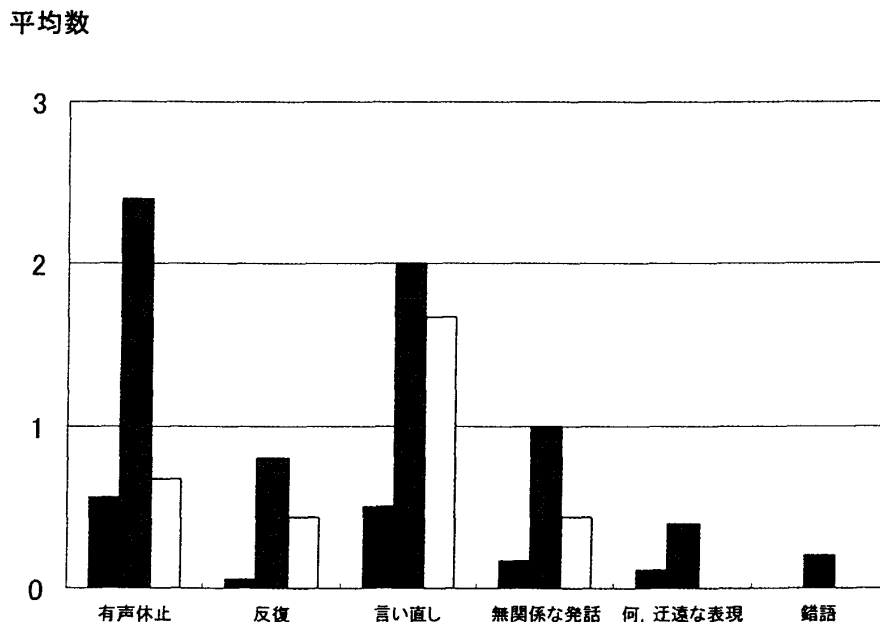


図3 テクスト構造の結束性の障害要因としての有声休止(「えーと」など)、反復(黒猫の……黒猫の)、言い直し(「猫が……猫の」など)、無関係な発話(「布でいいですか」など)、何あるいは迂遠な表現(テーブルクロスを「この布のようなもの」と表現)、錯語(テーブルクロスを「布巾」などと表現。または猫を「ネト」と表現)の平均数を各群ごとに示した。

【結果と考察】各群の形態素数、指示詞(語)数、接続詞(語)数は有意差を認めなかった(図2)。しかし、結束性の障害要因として有声休止や錯語などの誤りの平均数では軽度失語症群が有意に高いことが示された(図3)。表1に各群のテキスト内容を示し、健常成人群の70%以上を占めた項目(太字)について漫画の内容(意味)と考え、整合性の基準とした。失語症群と右半球損傷群の内容と出現率を示して整合性と漫画の内容とは異なる内容(非整合性)を比較した(図4, 図5)。これらの結果から、軽度失語症群ではテキストの結束性において、失語症の基本的な障害と関連した語想起の障害が談話の

障害に反映されたもので有声休止や錯語と言い直しが多く、十分な内容を伝達しないことが示され、渋滞した内容の少ない実際の談話の印象と一致する結果が得られた。また、右半球損傷群は結束性の指標には障害が見られなかったが、テキストの整合性において漫画の内容と異なる文が多く、テキスト内容(整合性)に障害があり、内容と合わずどこかがちがうという実際の談話に一致した結果が得られた。この研究においてSLTAでは明らかにならなかった言語障害を語用論的理論からの分析により、動的な日常生活の言語使用で実際に問題となる特徴を明確に示すことができた。すなわち、語用論的理論から

表1 各群の漫画の内容と平均出現率を表した。健常成人群18人の平均出現率の70%以上を占めた項目を太字で示し、操作的にテキストの内容（意味）の整合性の基準とした。

	健常成人 (N=18)	失語症群 (N=10)	右半球損傷群 (N=9)
部屋にテーブルクロスを敷いたテーブルがある	6%		
猫がくる（部屋に入ってくる, 目が覚める）	28%		
テーブルの上に魚がある	89%	70%	67%
黒猫が魚を狙う（見つける）	78%	30%	33%
黒猫がテーブルクロスを引く（取ろうとする）	83%	70%	67%
白猫が窓の外にいる	89%	70%	56%
黒猫は白猫に気づかない	6%	10%	11%
白猫が魚を横取りする	94%	60%	44%
黒猫がテーブルクロスを引いて落とす	56%	40%	56%
皿が割れる（落ちる）	72%	30%	56%
魚がない（お皿だけ落ちる）	78%	50%	33%
黒猫はしょんぼり（おかしいと思う）	17%	40%	11%
テーブルクロスは取られるし、魚は食べられない		10%	
カスになって食		10%	
下に落ちて食べれる		10%	
カバーされている		10%	
怒った			11%
猫が返す			11%
汚れて食べられない			11%
皿の上の魚が床に落ちる			11%
白猫に取られずに済む			11%
テーブルクロスが床に落ちる			11%
白猫が横取りしようとするが、黒猫が引っ張る			11%
魚もいっしょに壊れる			11%
落として取る			11%

のアプローチが、これまでの言語障害への介入アプローチでは明確にならなかった言語臨床像に対して一つの方法論として有効であることを証明することができた。

提 言

これまでの言語障害児・者への介入プログラムは、言語能力の改善を目的にしたアプローチが主流であった。実際的には、語用論的理論による介入は治療者側主導での導入が困難であることや状況の再現性を設定しにくいこと、評価の信頼性や治療効果の測定が難しいという現実があり、言語治療プログラムを設定することが困難な介入方法であると思われる。しかし、言語能力と言語使用の間に乖離があることももう一方の現実であり、言語能力を評価する多くの検査バッテリーにおいて問題点が明確になら

ない軽度失語症患者や右半球損傷群の言語障害、あるいは前頭葉損傷による社会性や言語行動の問題、さらに言語・認知・社会性の発達の統合における言語発達の問題とその障害の評価と治療においても語用論的理論による介入の有用性が期待される。

これからの言語障害への介入では実際の場面で状況に合った言語使用を可能にするプログラムが必要であると考えられる。言語の第一義としてコミュニケーション能力に焦点をあてた語用論的理論からの介入については、今後ますます重要視され発展するであろうことは明確である。そのために実践場面での評価法や介入理論の検討が必要である。最近ではザトラウスキーのような談話分析などの語用論における方法論についての研究報告もあるが、さらなる学問としての発展のために研究者間の一致した定義や論理、方法論の検証が必要であると考えられる。

文 献

- 1) Carrow-Woolfolk E (1988) *Theory, Assessment and Intervention in Language Disorders: an integrative approach*. Grune & Stratton, Harcourt Brace Jovanovich Inc., Philadelphia, pp1-64.
- 2) 田窪行則, 西山佑司, 三藤 博, 亀山 恵, 片桐恭弘 (1999) 談話と文脈, 岩波講座言語の科学7, 初版, 岩波書店, 東京, pp3-54.

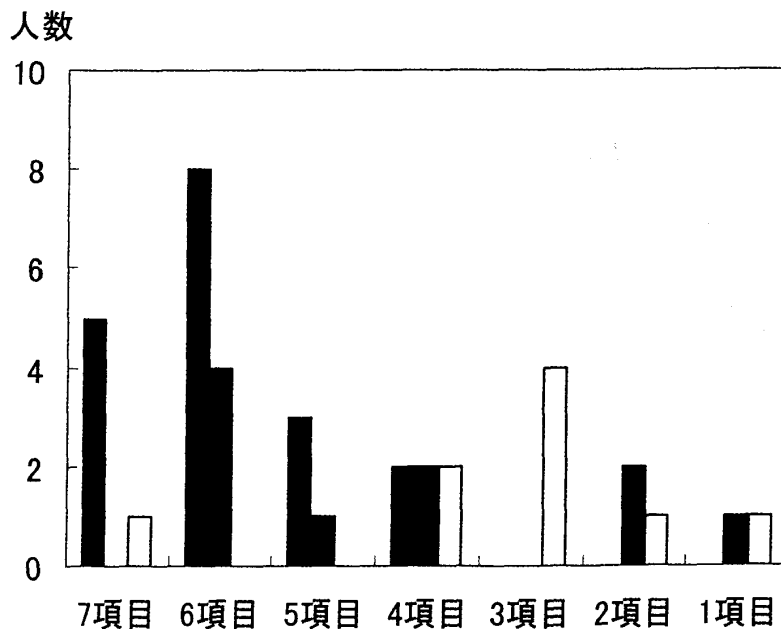


図4 健常成人群の70%以上の比率で出現した項目を漫画の内容としてテキストの整合性の基準としたときの項目数を横軸に示し、各群のそれぞれの出現項目数の人数を縦軸に示した。グラフ上の■は健常成人群、■は軽度失語症群、□は右半球損傷群。

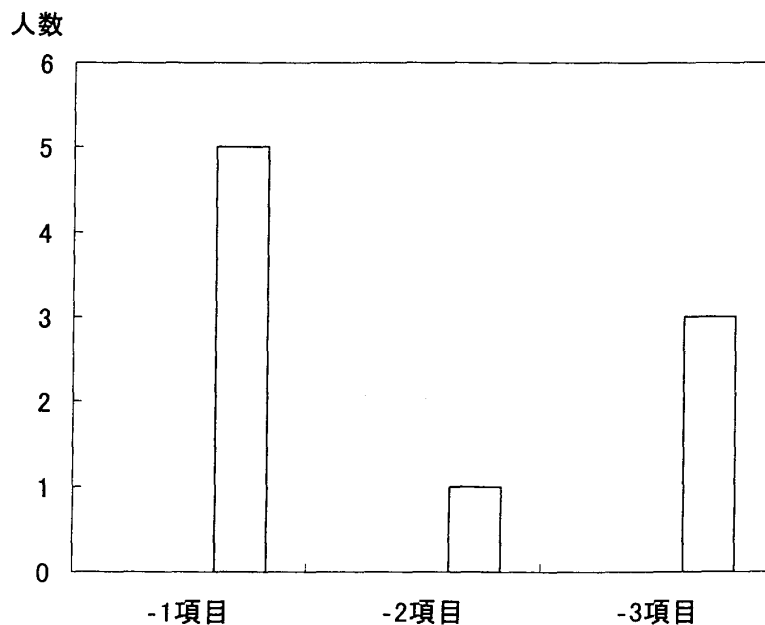


図5 漫画の内容と合わない項目を非整合性として横軸に項目数にマイナスの記号を付けてあらわし、各群のそれぞれの出現項目数の人数を縦軸に示した。健常成人群と軽度失語症群はいずれも0人でグラフに表れていない。□は右半球損傷群。

- 3) Austin JL (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. 坂本百大訳 (1978) 言語と行為, 大修館書店, 初版, 東京, pp163-198.
- 4) Grice P (1989) *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press. 清塚邦彦訳 (1998) 論理と会話, 劉草書房, 初版, 東京, pp31-60.
- 5) ポリー・ザトラウスキー (1993) 日本語研究叢書5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—. くろしお出版, 初版, 東京, pp5-38.
- 6) 秦野悦子 (1984) 前言語期から発話期における否定表現の展開. 教育心理学研究, **32**(3), 28-42.
- 7) Liles BZ (1985) Cohesion in the narratives of normal and language-disordered children. *Journal of Speech and Hearing Research*, **28**, 123-133.
- 8) Scherer NJ (1989) Using structural discourse as a Language intervention technique with autistic children. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, **54**, 383-394.
- 9) 秦野悦子, 浜谷直人, 吉川はる奈 (1994) 幼児の会話に関する語用論的分析—コミュニケーション障害事例—. 保育研

- 究, **32**, 116–125.
- 10) Perkins L, Crisp J and Walshawa D (1999) Exploring conversation analysis as an assessment tool for aphasia: the issue of reliability. *Aphasiology*, **13**(4), 259–281.
 - 11) Huber W and Gleber J (1982) Linguistic and nonlinguistic processing of Narrative in Aphasia. *Brain and Language*, **16**, 1–18.
 - 12) Bayles K (1982) Language function in senile dementia. *Brain and Language*, **16**, 265–280.
 - 13) Davis GA and Wilcox MJ (1984) *Language intervention strategies in Adult Aphasia*. In Chapey R ed, Williams & Wilkins, Baltimore. 横山巖, 河内十郎訳 (1992) 失語症言語治療の理論と実際. 創造出版, 第2版, 東京, pp177–203.
 - 14) Joannette Y and Goulet P (1990) Narrative discourse in right-brain-damaged right-handers. *Discourse ability and brain damage: Theoretical and empirical perspectives*, New York, Springer-Verlag, pp131–153.
 - 15) Brownell HH (1992) The use of pronoun anaphora and speaker mood in the interpretation of conversational utterances by right hemisphere brain-damaged patients. *Brain and Language*, **43**, 121–147.
 - 16) Halliday MAK and Hassan R (1985) Language, context, and text: Aspect of language in a social-semiotic perspective. Deakin University Press. 笈壽雄訳 (1991) 機能文法のすすめ. 大修館書店, 初版, 東京, pp5–82.
 - 17) Halliday MAK and Hassan R (1976) Cohesion in English. Longman Group Limited, London. 安藤貞雄訳 (1997) Cohesion in English. ひつじ書房, 初版, 東京, pp1–37.

(平成13年6月7日受理)

Intervention from Pragmatic Theory to Language Disorders

Mitsuru KOSAKA

(Accepted Jun. 7, 2001)

Key words : LANGUAGE DISORDER, INTERVENTION THEORY, PRAGMATIC THEORY

Abstract

This article was reported six theories for intervention into the language disabilities, namely : the neuropsychological theory, the information process theory, the behavioral theory, the cognitive organization theory, the linguistic theory and the pragmatic theory.

In addition it discussed about pragmatic approach to brain - damaged patients who had a slight deficiency in their linguistic forms. The results were that mild aphasics and right - brain - damaged patients had pragmatic disabilities of their discourse texts in explaining a series of four pictures. Mild aphasics showed significant errors in cohesion of text structure ; their texts included any filler words, paraphasia, and self - correction. In contrast with mild aphasics, right - brain - damaged patients had a deficit in coherence of texture. This result revealed with their clinical impression.

It's important that intervention into language disabilities prepare for the viewpoint of language use because there is often a gap between language competence and language use. In the future, we expect to discuss the method of applying the pragmatic theory to such intervention through practice, and to find agreements with this definition and methodology of analysis in many fields.

Correspondence to : Mitsuru KOSAKA

Doctral Program in Sensory Science, Graduate School of
Medical Professions, Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.1, 2001 1–7)